

\*\*\*読み下し文\*\*\*

出(北斎のこと)常に人に語るに、我は枇杷葉湯に

反し、九月下旬より四月上旬迄

炬燵を放ること無しと。如何

なる人と面会な須といへども

放ることなし。画くにも又かけ

倦く時は、傍らの枕を取りて、

眠る、覚めれば又筆をとり、

夜着の袖は、益無也とて不付候

本所、亀沢町はんの木馬場

借家の跡、老人長く

住居故、御咄に急可く

娘

御物語残り

悉以

御目通之節、言上

昼夜、如斯なる故、炭にては

逆上な須故、炭団を用ゆ

然るゆへ、虱の湧くをたどゆるに

物なし

画貼扇面

之備者、堅く

御断申候

三浦

八右衛門

為一

国許

角一畳之分、板敷分

佐倉炭俵 土産物の

桜餅の籠、酢の竹

の皮 物置と掃溜と

兼帯也

蜜柑箱に

高祖像を

安置須